グローバルに展開するvCloud Air

グローバルに展開するvCloud Airを日本から利用するVMware vCloud Airは、VMwareがグローバルで展開するクラウドサービスです。同一のサービスメニューを提供しています。現在は、米国、イギリス、ドイツでのサービス提供が発表されました。日本のお客様は、国内に加えて世界各国のサービスを日本から購入し、海外を含めた自社のITリソースを一元的に管理できるようになります。

2014年10月31日 発表時

対応仮想マシンOS一覧

- MS-DOS 6.22
- Windows 3.1
- Windows 95
- Windows 98
- Windows NT
- Windows XP (32/64)
- Windows Vista (32/64)
- Windows 7 (32/64)
- Windows 8 (32/64)
- Windows 2000
- WinServer 2003 (32/64)
- WinServer 2008 (32/64)
- WinServer 2012
- RHEL 2.1
- RHEL 3 (32/64)
- RHEL 4 (32/64)
- RHEL 5 (32/64)
- RHEL 6 (32/64)
- SLES 8
- SLES 9 (32/64)
- SLES 10 (32/64)
- SLES 11 (32/64)
- SLED 10 (32/64)
- SLED 11 (32/64)
- Debian 4 (32/64)
- Debian 5 (32/64)
- Debian 6 (32/64)
- CentOS 4 (32/64)
- CentOS 5 (32/64)
- CentOS 6 (32/64)
- Oracle Linux 4 (32/64)
- Oracle Linux 5 (32/64)
- Oracle Linux 6 (32/64)
- Asianux 3 (32/64)
- Asianux 4 (32/64)
- Ubuntu 8 (32/64)
- Ubuntu 9 (32/64)
- Ubuntu 10 (32/64)
- Ubuntu 11 (32/64)
- Ubuntu 12 (32/64)
- Ubuntu 13 (32/64)
- FreeBSD 6 (32/64)
- FreeBSD 7 (32/64)
- FreeBSD 8 (32/64)
- FreeBSD 9 (32/64)
- Solaris 10 (32/64)
- Solaris 11
- IBM OS/2 Warp 4
- NetWare 5
- NetWare 6
- eComStation 1
- eComStation 2
- SCO UnixWare 7
- SCO OpenServer 5
- Toshiba 4690 6

2014年11月5日 現在

vmware®

ヴイエムウェア株式会社 〒105-0013 東京都港区浜松町 1-30-5 浜松町スクエア 13F www.vmware.com/jp

Copyright © 2014 VMware, Inc. All rights reserved. 本製品は、米国および国際的な著作権法および知的財産法によって保護されています。VMware の製品は、http://www.vmware.com/go/patents のリストに表示 されている 1 つまたは複数の特許の対象です。VMware は、米国およびその他の地域における VMware, Inc. の登録商標または商標です。他のすべての名称ならびに製品についての商標は、それぞれの所有者の商標または 登録商標です。

vmware®

VMware vCloud® Air™

VMwareが提供するクラウドサービスにより真のハイブリッドクラウドを実現

VMware vCloud Airは、プライベートとパブリック双方のクラウド管理を共通化し、クラウド間での自由なアプリケーション連携や移行を、“ハイブリッド”に実現するVMwareが提供するパブリッククラウドサービスです。サーバリソース、クラウド間のスムーズな移動を可能にする仮想ネットワークやセキュリティコンポーネントに加え、単一の管理ツールを提供することで、仮想マシンの自由な移行やクラウドをまたがったアプリケーションの連携を可能にします。

VMware vCloud Airの特徴とメリット

1 既存仮想マシンの変更なく利用可能

- お客様データセンタ内でVMware vSphereで実行している任意のVMをフォーマット変換なしで移行可能
- 特殊なAPIの使用がなく、オンプレとの間の移動が可能

2 既存管理ツールを利用可能、既存のスキルをそのまま活用

- VMware vCloud APIをサポート
- REST APIアダプタを提供するサードパーティ製品での管理も可能
- お客様既存環境にあるvSphere Client、vClould Automation Center、vCenter Operationsからも管理可能

3 可用性の自動監視とVMの迅速な再起動を無料提供

- ホットスタンバイ冗長キャパシティを無料提供
- ネットワークの再構成の必要なし

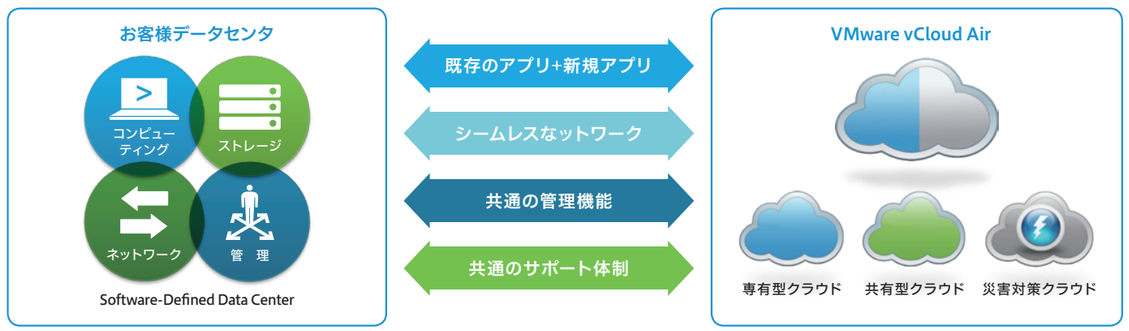
4 パフォーマンスのプロアクティブな自動管理で安心

- パフォーマンスの健全性を無料監視
- 過負荷状態の際には、自動バランシング

5 メンテナンス時のダウンタイムなし

6 90以上の仮想マシンOSをサポート

● VMwareが提供するクラウドサービスにより真のハイブリッドクラウドの実現



提供開始サービスメニューと今後のロードマップ

VMware vCloud Airのサービスメニュー

国内データセンタから3つのサービスを提供

専有型クラウドサービス

物理的に分離された、最も機能が豊富な専用のシングルテナントクラウドコンピューティングサービス

Dedicated Cloud
[専有型クラウド]

物理的に独立
自身のプライベートクラウド インスタンス

ベースリソース
- □ 120GB vRAM
- □ 30GHz vCPU

最小容量
- □ 6TB STDまたはSSD

- □ 50Mbps保証
- □ 1Gbps バースト
- □ 3パブリックIP

共有型クラウドサービス

コンピューティングリソース、標準ストレージまたはSSD活用型ストレージ、本番環境のサポート、および豊富なネットワーク機能を含む、論理的に分割された完全なマルチテナントサービス

Virtual Private Cloud
[共有型クラウド]

論理的に独立
リソース割り当ての保証

ベースリソース
- □ 20GB vRAM
- □ 10GHz vCPU マルチテナント

最小容量
- □ 2TB STDまたはSSD

- □ 10Mbps保証
- □ 50Mbpsバースト
- □ 2パブリックIP

災害対策サービス

オンプレミスのvSphere環境で実行中のシステムを、vCloud Airのマルチテナントクラウドへレプリケーションする安価でシンプルな災害対策サービス

Disaster Recovery
[災害対策]

論理的に独立
災害対策向けリソース

ベースリソース
- □ 20GB vRAM
- □ 10GHz vCPU マルチテナント

最小容量
- □ 1TB

- □ 10Mbps保証
- □ 50Mbps バースト
- □ 2パブリックIP
- □ 2フェールオーバ試験

*リソースの拡張はコンポーネント単位で最低リソース単位で拡張可能（パブリックIPのみ1つ単位で拡張可）

● 付加価値サービス（機能）は標準実装

ファイアウォール	VPN	ロードバランサー
Disk I/O	冗長化／高可用性	DHCP、NAT

- □ 左記のサービス・コンポーネントは追加コストなしで利用可能
- □ 各サービス・コンポーネントは、契約リソースを消費しない
- □ ネットワーク・セキュリティ コンポーネントはサービス管理ポータルから構成可能

● オプションサービスの拡張は自分のペースで可能

	サブスクリプション		使用量ベース		ワンタイム	
オプション	IPアドレス	Data Protection サービス*1				
	サポート	ネットワーク帯域				Compute*1
	Compute (CPU&RAM)	プライマリストレージ	ネットワーク帯域	サービスカタログ*2	オフラインデータ転送	フェイルオーバーテスト*1
ベースサービス	Dedicated Cloud (DC) / Virtual Private Cloud(VPC)/ Disaster Recovery(DR)					

*1 DRの場合のみ。*2 DC & VPCの場合のみ。

- □ 契約期間は1ヶ月～
- □ サービスの初期契約ではDC、VPC、or DRのベースサービスをオーダー
- □ 追加のキャパシティは個別のサービス毎に追加可能
- □ 使用量ベースのコンポーネントは必要に応じて追加・消費

主な活用例

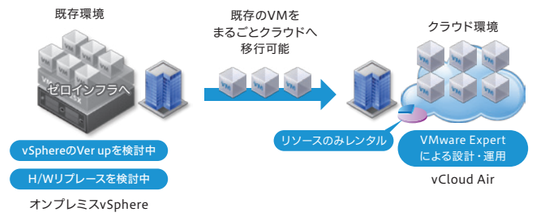
VMwareが提供するパブリッククラウドサービス(IaaS)が課題を解決

1 保守切れに伴うvSphere環境のクラウド移行

現在運用されているvSphere 環境から仮想マシンを、そのままvCloud Air上のクラウドリソースへ移行することで、社内側のH/W運用をvCloud Air側に完全にオフロードします。もう、H/W更改、vSphere のバージョンアップなどに悩む必要はありません。

課 題
- ● 既存vSphere環境のH/W保守切れに伴うH/Wリプレースを検討中
- ● 既存vSphere環境のバージョンアップを検討中
- ● IT担当者が少人数で、インフラ運用が大きな負荷になっている

コンセプトとメリット
- □ H/W 運用からの開放 [管理、入替、Ver upなどはクラウドへお任せ]
- □ トータルコストの削減 [初期コスト不要、運用コスト削減]
- □ 柔軟性向上 [余剰リソース必要なし、必要なときにすぐ拡張]
- □ そのまま移行 [既存のVMをそのまま変更なしで移行可能]

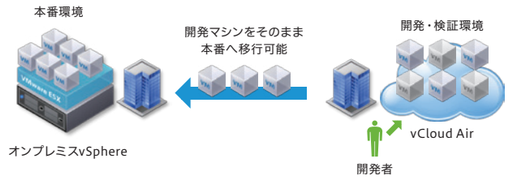


2 開発・検証環境のオフロード

開発・検証環境をクラウドで提供することで、より安価で、必要に応じてすぐリソースを拡張できる柔軟な開発環境を実現します。開発の終わった仮想マシンは、そのままオンプレミスの本番環境へ移行して活用可能。セルフサービスポータルにより、開発者に自由なプロビジョニング環境を提供します。

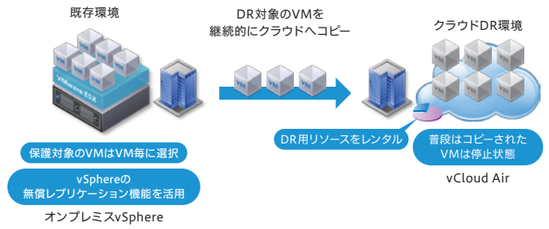
課 題
- ● 様々なシステムで開発・検証環境を維持管理。多大なコストがかかっている
- ● 開発チームからの仮想マシンリクエストをIT管理者が都度処理
- ● パブリッククラウドを使ってみたいが、どれくらい使えるものか不安がある

コンセプトとメリット
- □ H/W 運用からの開放 [管理、入替、Ver upなどはクラウドへお任せ]
- □ トータルコストの削減 [初期コスト不要、運用コスト削減]
- □ 1ヶ月単位で利用可能
- □ そのまま移行 [開発したVMをそのまま変更なしで本番環境に移行可能]



3 vSphere環境の災害対策先としての活用法

オンプレミスのvSphere環境で実行中の仮想マシンを、vCloud AirのDR as a Serviceへレプリケーションします。自社で災害対策用のデータセンターのレンタルやシステムの2重構築が必要なくなり、より安価でアプリケーション依存の無いシンプルな災害対策が実現できます。

課 題
- ● vSphere環境を利用中で、災害対策を行いたいが予算が限られている
- ● アプリケーションやストレージに依存しないシンプルな災害対策を行いたい
- ● 災害対策を行っているが、なかなかテストできずに復旧できるか心配

コンセプトとメリット
- □ 安価に災害対策 [自社でバックアップ用環境を整備する必要なし]
- □ 簡単に災害対策 [vSphere Web Uiからシンプルで簡単に設定可]
- □ 柔軟性向上 [余剰リソース必要なし、必要な分だけご契約]
- □ テストフェールオーバー [フェールオーバテストにより復旧信頼度アップ]